

器の帰属する時期よりは遅り得ない。従って、古墳築造時期は、これまでの調査で得られた両土師器を上限・下限とする限定された時期内に求めることができると考えられる。

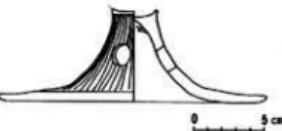
(※第44層には、黒土色・褐色土ブロックが混入し、自然堆積というより、埋土的様相が強い。)

(2) 出土土師器の特徴について

昭和53年度の調査で出土した土師器（第13図）は高杯形土器で、杯部は欠損しているが、脚部から裾部にいたる下半部の全様は把握できる。その特徴は、裾部径18.6cmを測り脚部の中位に3個の円窓を有し裾部が大きく広がることである。器壁はうすく、器面調整は丁重で表面にヘラミガキが施されている。脚天井部を貫通する中央孔は認められない。

一方、RP1は70個ほどの細片となって、約0.8×1.3m程度の範囲から集中して検出された（附図3（1）、第4図）。

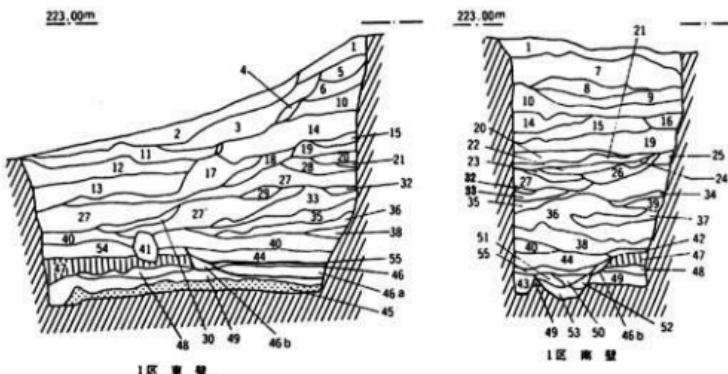
風化が著しく表面が剥落しているものが大部分を占め、器面の調整技法については明確ではない。胎土や焼成状況、色調などから、現段階では同一個体の「焼成前底部穿孔壺形土器



第13図 昭和53年度調査 後円部

4トレンチ出土土器実測図

（山形県立博物館「福島古墳昭和53年度調査報告」昭和54年（1979）から）



第14図 昭和62年度後円部4-1区土層断面図

（註8の文献から）

（土師器）」と考えている。遺物自体がかなりもろく、摩滅しているため接合途上であり、器形の全体像は今のところ不明であるが、頸部から体部へいたる断面形状から判断して、胴中央部かやや上に最大径をもつ壺と推測している。また、二重口縁壺のような口縁部分が付加されていた可能性もあるが、出土遺物のなかに、それに該当するような破片は認められなかった。

肩部には三段の粘土紐隆帯に縦の刻みを施した文様帯がめぐる。各粘土紐は、幅1.1cm前後で隆帯にはさまれた凹部は横方向のナデが認められ平滑である。頸部はほぼ直立ぎみに立上がる。頸部からの立上がりは内面で約1.5cmと非常に短い。3では頸部に接合部が認められ、また、4の外面下位と5の内面上位の両接合面に斜位の細いハケ目があり、この部分で接合し、ハケ目は表面には現れない。6は体部破片で沈線状の文様（？）が観察され、断面形状はやや外反する。頸部破片では、器壁の厚さが7mm前後であるが、6は4mm程度で非常にうすい。7は底部破片である。底部縁辺はかなり肥大し厚いが、立上がり付近は急激にうすくなる。6は、体部下半部の底部からの立上がり付近に位置するものかもしれない。いずれにしても、RP1は底部穿孔であること、肩部にある文様帯の様相などに顕著な特徴を見出し得る。

（3）帰属時期についての子察

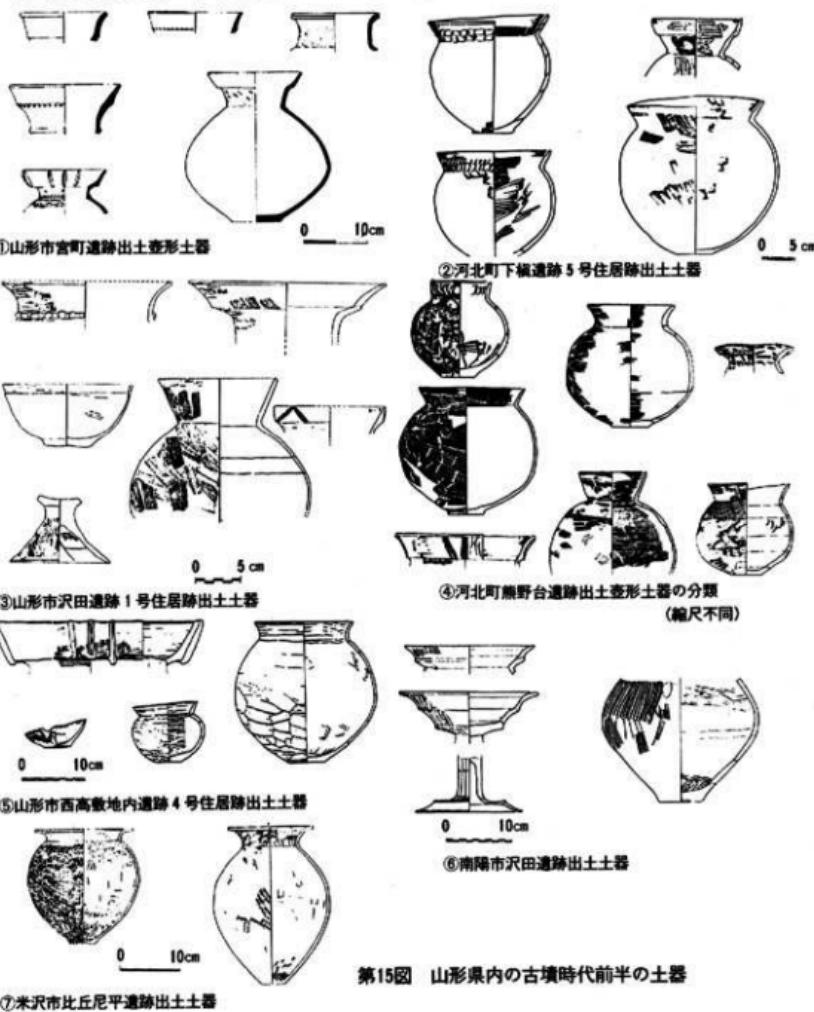
山形県内の土師器編年は、山形市嶋遺跡の調査を契機として、「山形盆地における土師器の編年」についての概要が提示された（註21）。それは、宮城県を中心とした氏家氏の7型式編年に準拠したものであった（註22）。そのなかで、氏家編年の「塙釜式土器」に並行するものとして、「宮町式土器」の提唱がなされている。宮町式土器は、山形市宮町の川原田、檜葉ノ木地内にまたがって、暗渠工事に際して出土した一括資料を標式とし、「弥生文化の末期から古墳文化の確立するまでの過渡的な時期のもの」という概念でとらえられている。器種としては、壺・高杯・器台などがあり、壺には二重口縁の棒状浮文をもつもの、頸部に突帯をめぐらし、刻みをもつもの、肩部にクシ目の波状文をもつものなどが認められる（第15図①）。しかし、遺構のなかで把握された発掘資料ではなく、資料的制約はまぬがれないものであった。

その後、氏家氏は浮文系土器の問題を含め、塙釜式土器がさらに細分され得るものであることを指摘されている（註23）。近年、山形県内でも調査例の増加に伴い、古墳時代前・中期にわたる資料の集積が行われており、川崎利夫氏によって、古式土師器の問題と土師器編年の試案についての提示がなされた（註24）。

また、米沢盆地では南陽市沢田、諏訪前、米沢市比丘尼平の各遺跡から古式土師器や古墳時代前半期の資料の報告があり、山形盆地でも集落跡の調査によって、遺構内での一括遺物に対しての検討が行われ、阿部明彦氏はそれらを前提にした再編成を試みている（註25）。宮城県でも、大橋遺跡の調査以後、集落跡の調査資料の集積によって、古墳時代前半期の一括資料について、より具体

的な検討と細分が可能となっており、丹羽 茂氏らを中心として精力的な取り組みがなされている（註26）。ここでは、稲荷森古墳出土の土師器について、前述したような前提をふまえながら、その様相について考えてみたい。

稲荷森古墳の4トレンチ1区出土の高坏形土器については、昭和53年度の調査時に「所謂 塩釜式土器に並行するもの」と理解されている（註27）。基本的には現在でもその認識に変わりはない。



第15図 山形県内の古墳時代前半の土器

山形県内で、当該土器の如く裾部が大きく広がる高环形土器の類例は現在のところ報告されていない。山形盆地の河北町熊野台遺跡の70号土壙から坏部が丸底を呈し無段の高坏が出土している（註28）。また、山形市沢田遺跡1号住居跡からも、二重口縁壺、頸部に隆帯をもつ壺などとともに無窓の高环脚部が出土している（註29、第15図③）。これらはいずれも脚部から外反ぎみに裾部へ至る円錐形を呈するものである。それより後出する時期のものと考えられる山形市坊屋敷遺跡第70号住居跡（註30）では、脚接合部からほぼ直線的に広がる裾部をもつもの、河北町下横遺跡（註31）では、脚部が円柱状を呈し裾部が外反ぎみの円錐形をなすものなどが認められる。

宮城県では、塩釜式土器について大きく三段階からなる変遷をとらえ、整理されている（註32）。それによれば、高坏では第1段階に裾部が大きく広がる形態のものが特徴的に認められると指摘されている。稻荷森古墳出土の高环形土器の形態的特徴は、宮城県大橋遺跡第1号住居跡出土の一括資料のものと極めて類似する。また、円窓が比較的大きいこと（稻荷森古墳出土高坏では径約1.2cm）、共通する要素と考えられることから、塩釜式第1段階とみなされる。

一方、RP1については、山形県内や近県では直接的に類例を比較検討し得る資料が把握されていないのが現状である。

山形県内の古墳時代前半を中心とする集落跡出土の壺形土器では、その特徴から数種の類型にとりまとめることが可能である。それらを整理すると、つぎのとおりとなる。

- ① 頸部が直立し、口縁部中段に稜を形成し、大きく外反する二重口縁壺。山形県内では、山形市沢田1号住居跡（註33、第15図③）、高畠町地獄岩洞穴遺跡（註34）などから出土している。体部はいずれも欠損しているが、球形の胴部をもつ端正な形態を呈するものと思われる。
- ② 浮文系文様をもつ一群。山形市西高敷地内第4号住居跡（註35、第15図⑤）、河北町熊野台第39号住居跡（註36、第15図④）、山形市坊屋敷遺跡等から棒状浮文を付加した二重口縁壺が出土している。
- ③ 頸部に粘土細隆帯をもち刻み目をつけた一群。山形市宮町遺跡、沢田1号住居跡出土例に認められる（第15図①、③）。隆帯は頸部のほかに、口縁部中段の屈曲部に伴うものもある。また、沢田遺跡1号住居跡出土例では、隆帯上を指頭で押圧し、連続した凹みを有するものなどがある。河北町下横遺跡5号住居跡出土例（註37、第15図②）では、“くの字”状に外反する口縁部の頸部に逆方向2段にヘラの押引きが認められる（ただし時期的には後出）。
- ④ 頸部から外反しながら立上がり、口縁部に粘土帶を付加したり、折り返しによる肥厚部をもつ壺で、山形県内では比較的多く出土している。
- ⑤ 頸部から“くの字”状に屈曲し、口縁部中段に稜を形成し、口縁部がやや外反ぎみに立上がるるもので、東根市扇田出土の壺（註38）、山形市谷柏出土例など、比較的多く認められる。
- ⑥ ほぼ直立する口縁部に“ハの字”状にクシ状工具による圧痕文を伴うもの。沢田遺跡1号住

居跡出土例（第15図③）。

⑦ 棒状付文、頸部に粘土紐隆帯を伴い、肩部に波状文を付加したもの。山形市宮町出土例（第15図①）。

⑧ 頸部に円形刺突文を伴うもの。米沢市比丘尼平出土例（註39、第15図⑦）。

⑨ 口縁部が単純に外反するもの。

以上のような9類に類型化することが出来る。①～③および⑥、⑦、⑧については、伴出した遺物などの検討も含め、塩釜式I段階、④については、塩釜式I段階からIII段階にかけて一連として認められるもの、⑤について南小泉II式前半期の段階まで維続して認められるものと考えている。⑨については塩釜式I段階から普遍的に認められる。

しかし、これらの類型のなかに、RP1に付加されたような要素を直接的に見出すことはできず、しかも当該期の土師器が比較的胎土を厳選し、器壁が薄く丁重な整形を行っているのに対し、RP1の胎土の状況や焼成状態などをも考慮すると、在地の土師器とはかなり様相を異にしていると考えられる。

米沢市比丘尼平遺跡出土土器の円形刺突列点文は、関東地方を中心とする後期弥生式土器の円形浮文にその系譜を求めることも可能であり、壺全体のプロポーションや口縁部形態の様相は、外来的要素を指摘することができる。また、南陽市沢田遺跡ST5床面出土の、円柱状の脚部に裾部中央に稜を形成する高杯（当該報告書中のB4類）あるいはST6F1出土の口縁部中央で屈曲し稜を形成する壺（同C-2類）などのように、在地の土師器には認められない器形を含んでいるものがある（第15図⑥）。とくに、C-2類として分類している壺は、いわゆる“S字状口縁壺”との関連を考え得る（註40）。

RP1の「三段の隆帯上の横走する縦位列刻文」（第3章D区所見）という特徴的様相から、あえてその関連を求めれば、中国地方の「吉備」を中心とする貼り付け突帯をもつ弥生式土器などにその系譜の一端を推定することも可能ではあるが、今後の検討課題としておきたい。

出土土師器の性格として、上記のごとく集落跡出土とRP1は古墳出土という基本的な違いがあり、一様にはとらえられぬ点はある。RP1は墳丘に起因する堆積土層中に含まれており、底部穿孔が施されていることをも考えれば、古墳にかかる儀器としての性格を持つものと思われる。その儀器としての性格から、特殊な文様構成やスタイルが伝世的要因として残り得ることは十分に考えられる（註41）。しかし、性格の違いはあるものの、何らかの文様的要素をもつことを基準として考えれば、大きく塩釜式並行の範疇ではとらえられ、少くとも丹羽茂氏のいう第Ⅲ段階までは下らないのではないかと推測される。それは、一方では4トレンチ1区出土の高杯形土器の出土した土層断面の検討からも類推できる。

(4) まとめにかえて

以上、稻荷森古墳の出土土器について検討してきたが、RP1については全体のプロポーションも把握しきれていないうえ、類例の比較、検討もまだ十分ではないが、あえて予察的意図を含めて、現段階での所見を述べた。

出土遺物の検討からすれば、古墳築造は4世紀代には確実に済ると考えている。特にRP1は在地の土器群では理解し得ないうえ、外来的要素を考えなければならぬものである。その伝播と系譜の問題については今後の課題とし、継続して追求する必要がある。集落跡でも、南陽市沢田遺跡出土遺物のなかに、いわゆる「S字状口縁甕」と考えられるものが認められ、当該地域の土器群が成立する過程に、古墳成立の様相も含め、その系譜の問題が大きな課題となる。また、これまで述べたように、古墳の築造時期決定資料となり得る塩釜式第I段階の高坏形土器（上限）とRP1（下限）の出土状況の検討や遺物が示す様相から推測すれば、高坏形土器に連続した時期的な把握もでき、4世紀後葉段階まで済る可能性があることを指摘しておきたい。

4. 稲荷森古墳の形状——とくに古墳の築造企画の推定——

南陽市長岡所在の稻荷森古墳は、古墳時代前期の前方後円墳でなかろうか。この疑いがもたらされたのは、氏家和典氏による宮城県名取市雷神山古墳の墳型分析結果（註42）に触発されてのことである。赤湯園芸高等学校の校地内で、南小泉II式期の埴輪や石製模造品を得ていた秦昭繁氏は、この古墳の、後円径と前方部長の比が6:3となることを確かめ、東海林繁子氏のいう「前方後円形をなす古代遺跡」（註11）は、まさに本格的な前方後円墳であろうと想定した。一方、柏倉亮吉氏も、1961（昭和36）年次の調査が不十分なことから、山形県史編さん事業の一環としての再調査を企画された。1975（昭和52）年に実施した測量調査は、佐藤鎮雄氏、佐藤庄一氏はじめ地元研究者と、加藤が率いる山形大学学生と卒業生の手で進められた。その成果は、稻荷森古墳調査団の佐藤鎮雄氏が報告したところである（註13）。

200分の1測量図による墳型分析を試みた氏家和典氏と加藤は、次のような結論に達した。

——昭和52年、山形県史編さん室、南陽市教育委員会、南陽市稻荷森古墳調査団によって測量調査が行われた（原註22）。B.C:C.P:Dが6:1.5:1.5の銚子塚式の型であるが、〔宮城県色麻町〕念南寺古墳と反対に前方部両側墳麓の延長線のうち東側のものが後円部中心を通り、後円背後で交わるものである。しかも前方部前端の墳麓線は、この交点を中心とし、前方部前側墳麓延長線を半径として描いた弧上に重なる。前方部前端の幅は3単位であるから、6単位を原形としたものであろう（氏家 1978）。

——この古墳の後円部径に対する前方部幅の比は50%，計測点間の比は6:2:1。いわゆる銚子形式の古墳である。この計測点を求めるのに苦労した。前方部幅の垂直二等分線が後円径の

中心を通らない。つまり「ねじれ」た前方後円墳なのである。かえって、前方部左側縁線の延長上に後円径の中心がのる。両側の前方部側縁線の延長上の交点、すなわち結合点は後円径周線上にある（原註4）。

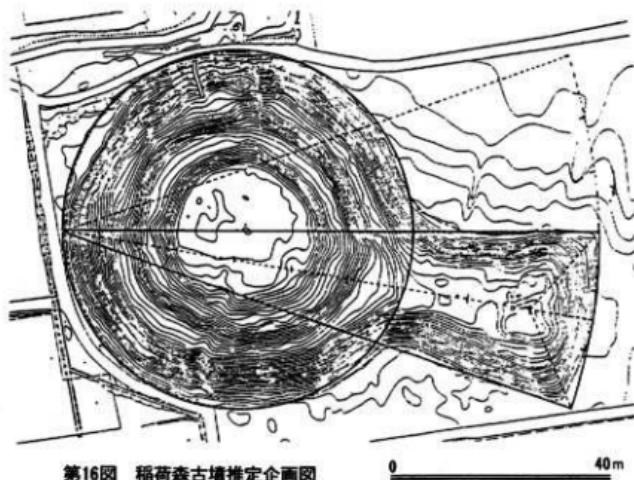
前方後円墳は左右対称が常態である。稻荷森古墳は前方部右半分が築造後に削平されたか、あるいは当初から造営されなかつたかのいずれかである。種々検討を試みた結果、その部分は当初から築成されなかつたものと判断された。稻荷森古墳は、本来あるべき姿の墳形についてその規模の縮小を余儀なくされたか、あるいは規定内の土量をもって造営するのに、前方部長をより長大にみせるために、片側の築成を省略したかである（加藤 1978）。

加藤は、このような形態の前方後円墳（宮城県名取大塚山古墳、同県念南寺古墳を含む。註42）に、「前方部半裁型」の名称を与えた（註43）。氏家氏もその称呼を用いている（註44）。氏は宮城県内の「前方部半裁型」の前方後円墳は、名取大塚山、念南寺古墳に加え、白石市瓶ヶ盛・仙台市長町裏町古墳をもその範囲に入れた。「前方部の巨大化は雷神山古墳で頂点に達し、以後の前方後円墳はすべて後円径を下まわっているが、東北地方では不可思議な現象の見られるものがある。その典型的なものは色麻町念南寺古墳、名取市名取大塚山古墳、山形県南陽市稻荷森古墳などで、前方部前端幅が後円径と同大もしくはそれ以上になるのを避けて、縱に半裁した形をとるから、墳形はいびつになる。古墳規制の一種と考えるべきであろう。白石市瓶ヶ盛古墳、仙台市長町裏町古墳もこの可能性が強く、5世紀半ばから後半期にかけての現象のようである。」（註45）

1978、79（昭和53、54）年の山形県立博物館調査では、前方部前端と前方部両側縁に発掘溝を設けた。前方部東側の墳麓「3トレンチ」および「KE区」の調査で、現墳麓の東2～3mの距離にある「落ち込み線」の外へは、墳丘の盛土はなかったと判断された。つまり、稻荷森古墳の前方部半裁は後世の改変でないと判断した。

今次調査では、前方部前端東南隅に、「G区」を設けた。ここで前方部の前縁線と東側側縁線の交点を探ろうとした。その結果は、「調査の概要」（11頁参照）のように、前縁線はほぼ確認された。東側側縁線の大部分は明確にしえなかつたものの、その交点、つまり前方部の東南コーナーは把握されたものと解せる。その限りにおいて、前方部半裁の確証を得た、と言い得る。したがって、稻荷森古墳についての氏家・加藤仮説はなお意味をもつと考えている。

山形県立博物館の「概報」（1980）に記された、後円部北1トレンチ、同西2トレンチ、くびれ部KW区、前方部前端ZS区、前方部東側縁3トレンチ、くびれ部KE区にみられた「落ち込み線」をもって、造営時の墳麓とする考案が一部にある（註46）。この結果は、古墳の全長100mの規模となるという。この数値はとらない。従前からの96m前後とみる。落ち込み線は、「調査の概要」のH区、I区、J区の説明のように、長岡山から連なっていた原丘陵の端部で、これを削り出して墳



第16図 稲荷森古墳推定企画図

0 40m

型を整えているのである。

後円部の原形について、阿子島 功氏は平面的に「四つの突起」の存在を推定した（19頁参照）。対向するそれぞれの二等分線が直交するとはいえないものの、後円部中心と前方部東側側縁線の延長を結んだ仮想主軸線の方向とほぼ一致する点は見逃せない。この点は種々解釈があろうが、南北の二つの「スロープ」が、前方部半裁型としての稲荷森古墳の仮想主軸線と深く関わると解しておきたい。

なお、別項のように、稲荷森古墳の造営年代は、墳丘盛土直下および墳麓出土の塙釜式並行土師器からして、4世紀代塙釜式期に落ち着くこととなった。氏家・加藤仮説の年代観は訂正を余儀なくされている。6:6型式とみた会津大塚山古墳を基準としたこの年代観は、会津大塚山古墳の再測量の結果からしても赤、改変を余儀なくされている。前方部半裁型古墳の造営年代推定は、氏家氏による仙台市遠見塚古墳は4世紀末、名取市雷神山古墳は5世紀前葉という、1960年代の推論（註42）の上に構築されていた。これに関しては、遠見塚古墳および雷神山古墳の再調査で、その造営年代が繰り上げて考える段階に来ている（註47）。その補正是別の機会にしたい（註48）。200分の1新測量図（南陽市教育委員会 1985年作成）を利用した、前方部半裁型としての稲荷森古墳の企画推定図（第16図）をつける。

(原註22) この古墳測量図の200分の1縮尺のものを、加藤 稔氏から頂き、同氏とともに検討する機会をえた。

(原註4) 稲荷森古墳の地形の解析、とくに計測点の確定にあたっては、氏家和典氏のご教示を得た。

第5章　まとめと課題

1. 調査のまとめ

今次調査は、昭和62年度に続き、稲荷森古墳の史跡整備の資料を得るために、改変状況・周濠の有無・前方部前端部状況・葺石と埴輪の有無等の確認を主な目的として実施した。これらの結果を中心に、昭和62年度および従前諸調査も含め、把握した事項を次に述べる。

(1) 後世の改変部分

後円部北半の裾部では、いくつかの改変が認められた。

B・D両区で検出された「地山の段差」は、埴籠残存部である。したがって、後円部北東部埴籠では最大幅約2.5m、長さ20~25m程、広く削平等の改変を受けたものとみられる。また、後円部北西では小規模に、同東部では比較的大規模に、共に農道造成に伴うとみられる改変が認められる。

前方部今次各調査区内の埴籠では、後世の溝が確認され、築造時の埴籠線部分はこれら溝により削減している。

墳丘斜面全域では、自然的崩壊の他、通路や神社（祠）所在地等成因の明らかな人為的改変や、溝・土壤・性格不明遺構等築造後の様々な遺構がみられる。

墳頂部については、前方部・後円部双方に後世の比較的小規模の遺構が数多く存在する。後円部墳頂の直径が仮に23.5~24.0m位の正円に近いものとすれば、南西半は、人為的または自然的改変を広く受けているとみられる。

前方部では、北半はほぼ平坦であるが、これに続く南西のコーナー付近では改変が推測される。また、墳頂南端には、部分的な二段築成のような元々は一段の方形（壇）状の高まりがあり、この東半は、後世の遺構により改変を受けていると推定される。

このように、築造後の種々の人為的・自然的改変がみられ、後円部北東部・同東部や前方部南端墳頂で比較的の改変が著しいものの、巨視的にとらえれば、保存の良い古墳ということができる。

(2) 周濠の有無

これまでの調査では、明確に周濠と認定しうるものは発見されていない。なかつたものとみなされる。

第2表 従前の発掘調査結果と昭和62・63年度

項目	従前の発掘調査結果
1. 所在地	山形県南陽市長岡字種荷森
2. 土地の所有区分と地目	民有地 山林
3. 史跡指定	南陽市指定史跡
4. 発掘前の測量調査と実測図	昭和52年(1977)4月29日～5月8日 山形県広報課、県史編さん室と種荷森古墳調査団が担当。実測図は、等高線間隔0.5m 縦尺1/200
5. 発掘調査主体	山形県教育委員会・山形県立博物館
6. 調査期間	第1次 昭和53年(1978)8月8日～同年8月26日 第2次 昭和54年(1979)7月23日～同年8月11日
7. 発掘の目的	第1次 古墳の範囲確定、墳丘造成法、周濠の有無確認 第2次 墳丘造成の方法および時期の確認
8. 墳丘の規模等	全長96m 後円部径62m 前方部長34m 前方部幅32m弱 後円部高さ10m弱 前方部高さ5m弱 後円部段築1段の高さ5m弱 2・3段は各2m強 主軸方位N-60°-W【後円部頂点(後円部の中心点)と前方部頂点(前方部幅の二等分線と前端の両縁より上の稜線との合致点)】とを結ぶ線】
9. 立地	洪積台地 長岡丘陵
10. 調査地	第1次 後円部側 1・2・4・5各トレンド 前方部側 3トレンド 第2次 くびれ部 KW, KE区 前方部 ZS区
11. 外部施設	埴輪 検出されていない。ない(樹立されない)と考えられる。 甕石 明確に確認されていない。ないと考えられる。 周濠 検出されていない。ないと考えられる。
12. 内部主体	未調査
13. 築造法	旧丘陵を削り出し、後円部第1段と前方部の大部分をつくり、さらに旧丘陵の地山肩の上に盛土している。
14. 検出された墳麓線	くびれ部 KW区, KE区で検出 KW区では、墳形と整合。KE区では、やや不整合を呈する。
15. 築造時の整地帯	現墳麓部から1トレンドでは10.6m, 2トレンドでは約8m, 3トレンドでは2m, 5トレンドでは約10m。KW区, KE区では約2m, ZS区では約1m各々離れた地山落ち込み部(旧丘陵)までが整地帯。
16. 発見された遺物 (一部は、築造とその年代に係る事項)	第1次・a墳丘内…4トレンド盛土直下から、塙釜式期器台形土器(土師器)1 盛土中から、ナイフ形石器、繩文土器、石器、土師器、須恵器 b墳丘外…土師器、須恵器 第2次 繩文土器、石器、平安時代の須恵器、土師器、中世陶器
17. 年代	1. 5世紀代(周辺出土南小泉Ⅲ式の遺物から) 2. 4・5世紀型の前方後円墳

発掘調査結果の比較（昭和36年度調査は削除した）

昭和62・63年の発掘調査結果	
同左	
市有地 立木伐採し草地	
国指定史跡（昭和55年5月24日指定）	
昭和60（1985）年6月 南陽市教育委員会が主体 実測図は等高線間隔0.2m 縦尺1/100・1/200	
南陽市教育委員会	
第1次 昭和62年（1987）10月16日～同年11月16日	
第2次 昭和63年（1988）8月1日～同年11月22日	
史跡整備の基礎資料として墳丘残存（変更）状況把握が主な目的。	
全長A96m〔B約97m（Bトレンチ内墳籠線からI区SD16mの確認上場まで）〕 後円部径62m 前方部長34m 前方部幅30m 後円部高さ約9.6m 前方部高さ約4m（a・前端部 約4m b・北半部 約3.5m） 同左 および前方部は部分的に壇状の高まりあり。 主軸方位N-30°10' - E [同左] 盛土量は約9,000m ³	
第三紀中新世の凝灰岩からなる残丘（長岡丘陵）	
第1次 後円部 A・B・C・旧4 各区	
第2次 後円部 D・E 各区 前方部・くびれ部 F・G・H・I・J 各区	
同左	
同左	
旧丘陵を削り出し、後円部第1段と前方部の大部分をつくり、さらに、旧丘陵の主として表土層の上に盛土している。	
① B・D区では、墳丘が削平され、残存した墳籠部を検出。 ② G区東南コーナーで一部検出。 ③ 前方部では、現墳籠をめぐる溝の内にあったと考えられる。	
Bおよび、旧5トレンチでは、検出した墳籠線から7m、I区（旧ZS区を含む）では、現墳籠部から約16.5m、H区では約1m離れた地山落ち込み部（旧丘陵）までが整地帯。 他は同左	
第1次 ① 楯文土器、土師器、須恵器（平安時代）、中世陶器 ② 左記「壇台形土器」は「高杯形土器」（埴釜式1期）であり、4-1区の旧表土下の住居跡出土とみられる。 第2次 ① D区第7層から底部穿孔壇形土器（土師器） ② 楯文土器、石器、土師器、須恵器（平安時代）、中世陶器、および鉄器 ※左記「ナイフ形石器」は、「基部整形石刀」である。	
○墳形から古墳時代前Ⅱ期 ○4世紀後葉（昭和53年度出土の高杯形土器と昭和63年度出土の底部穿孔壇形土器の時期の間）	

(3) 前方部南端の改変状況

墳麓線部が確認されたのは、東南コーナー東側線のごく一部分であり、G区における南端墳麓は、ほぼ残存していると推定されるものの若干の改変がみられる。その他は、裾をめぐる溝の範囲内に存在していたものといえる。また、墳丘斜面には、部分的な改変がみられるが、全体的には、旧状を反映しているものと考えられる。

(4) 莢石・埴輪

埴輪は今までに発見されていない。ない(樹立されない)ものとみなされる。
くびれ部における集石遺構や、後円部墳頂における砾石の検出の例はあるが、いずれも葺石とは認められず、なかったものとみなされる。

(5) 墳丘の規模

主軸方位 N-30°10' - E (附図2のNo.1～No.3石杭のライン)，現地表上では全長96m [ただし、後円部Bトレンチ検出の墳麓部から、前方部南端墳麓推定線 (I区SD16溝の確認上場) までは約97m]。後円部底径約62m、前方部長34m、前方部南部の幅30m、後円部高さ約9.6m、前方部南端の高さ約4m、同北半の高さ約3.5m。後円部段築1段の高さ5m弱、2・3段は各2m強。前方部段築1段の高さ約3.5m、部分的な壇状の高まりの高さ約0.5m強。古墳全体の盛土量は約9000m³。

(6) 内部主体

未調査である。昭和62年度Aトレンチでは、表土剝離による調査が中心であり、内部主体に係るプラン等は把握されていない。

(7) 築造法と整地跡

旧丘陵から切断のうえ削り出し、後円部第1段と前方部の大部分をつくり、さらに主として旧丘陵表土層の上に盛土を行っている。地山を削り、整地した平坦面が古墳周囲で検出されている。

(8) 墳形

前方後円墳である。後円部三段、前方部一段 (部分的に壇状の高まりあり) の段築を有する。平面形態は、後円部にくらべ前方部が短い、いわゆる銚子形を呈する。くびれ部の墳頂に若干高まりがみられる。前方部前縁南端線は、やや弧状を呈し、両コーナーは、直角に近い角度をもつ。

(9) 古墳築造の年代

銚子形（註49）の平面形、後円部にくらべ前方部が未発達であること、前方部墳頂端部に壇状の高まりがみられること等の特徴と、前方後円墳の型式の変遷（註50）とを比較して考えれば、前二期4世紀（後半）型の古墳とみなすことができる。

後円部出土の高杯および底部穿孔壺の時期と墳丘からみた年代を合せ考えれば、稻荷森古墳の築造は、4世紀後葉とみなすことができる現段階では妥当と思われる。

2. 今後の課題

稻荷森古墳の整備方針は、「基本的に現状保存」であるため、調査は、改変状況や周濠等外部施設の確認が中心であり、この目的については、一応の目標に達したものといえる。古墳の性格、年代等を把握するための規模や形態等の確認については、将来に向けて次の課題が残されている。

- ① 規模、とくに平面形態把握のための墳麓線の確定が、まだ部分的である。墳麓部を面的に調査し、墳麓線を検出することにより、より正確な規模が把握しうる。また、とくに前方部南端の墳麓状況は古墳の形態による年代確定の重要な資料となる。
- ② 墳頂部の形態や規模については、まだ不明確な点がある。後円部墳頂の直径および平面形態ならびに、前方部墳頂の構造と形態・寸法等の調査が残されている。
- ③ 段築については、後円部が三段築成であることは明らかであるが、築造時の段築の状況と造成方法は、まだ部分的にしか把握されていない。
- ④ 周濠は、ないものと考えられている。しかし、たとえば浅い土取り跡がみられる古墳の例もあることから、古墳周囲の地山整地帯外についての調査が必要である。
- ⑤ くびれ部頂部付近は、やや盛り上がりを呈しており、これが崩壊土の堆積によるものなのか、または本来高かったのか、つかまれていない。
- ⑥ 長岡山丘陵を切断して造成されたとみなされているが、丘陵側の調査が行われていない。
- ⑦ 主体部は未調査であり、位置や平面プランすらつかまれていない。物理学的探査方法による調査も含めて、今後の課題である。
- ⑧ 築造時期にかかる遺物は、後円部出土の土師器高杯と、同墳麓出土の土師器底部穿孔壺形土器のみである。両者の時期の間が古墳の築造時代であることから、とくに後者についての調査検討がさらに必要である。

これら古墳の年代・性格に係る課題は残されているものの、整備基本方針にのっとり、今までの調査資料に基づいて、「市民のための古墳の整備」を今後続々めざしていく所存である。

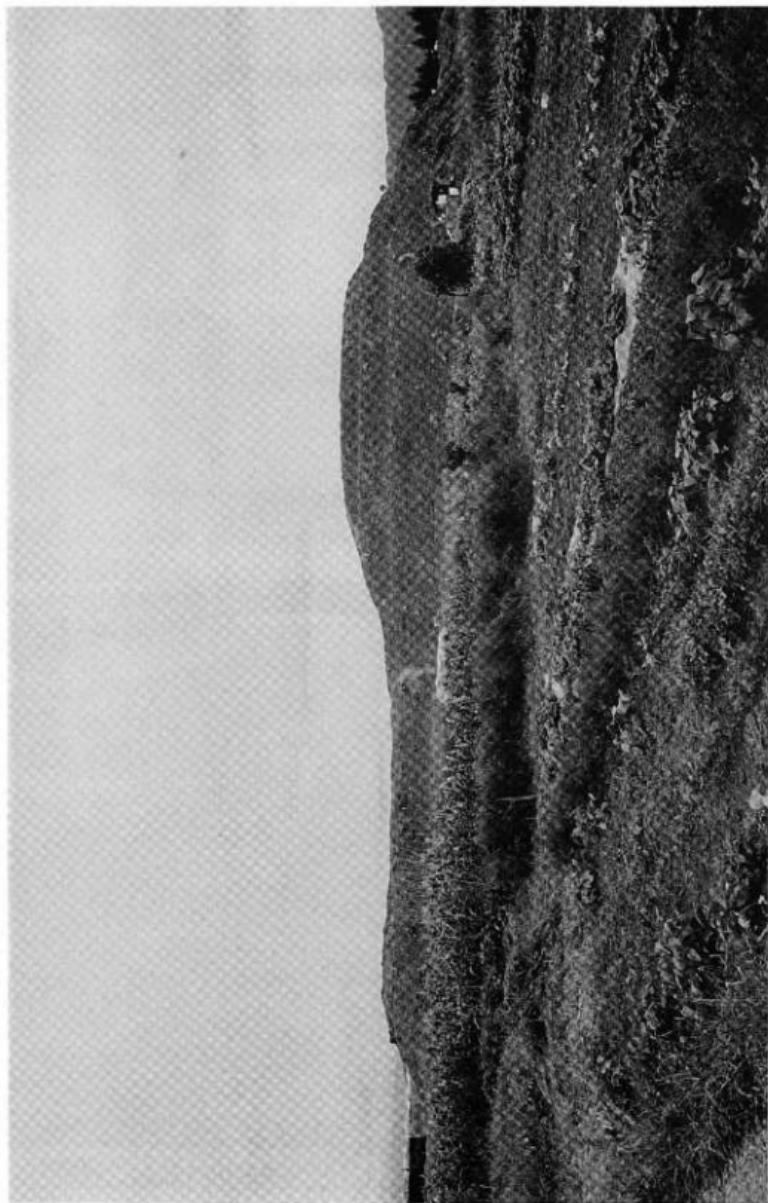
註

- 註1 佐藤 順 墓 他 昭和62年(1987) 「南陽市史考古資料編」
註2 佐藤庄一・名和通朗 昭和60年(1985) 「『武田連跡発掘調査報告書』」
註3 渡 谷 実 雄 昭和61年(1986) 「山形県埋蔵文化財調査報告書第80集」
註4 丹 真 広 昭和60年(1985) 「『赤堀町遺跡』『今宿野遺跡』・一本木遺跡・馬場遺跡」
宮城県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 註5 註 1 に 同じ
註6 註 2 に 同じ
註7 註 1 に 同じ
註8 西野一部・茨木光雄 昭和63年(1988) 「『鶴ヶ峰古墳』史跡整備に係る昭和62年度発掘調査概報」
南陽市埋蔵文化財調査報告書第3集
註9 鮎 三郎 昭和43年(1968) 「『渡野遺跡を中心とした赤堀町の古い文化』『赤堀町史』」
註10 西 村 真 次 昭和13年(1938) 「『赤堀町の古代文化』特に赤堀古墳群に就て」
註11 東 海 葉 子 昭和37年(1962) 「赤堀町大字長浜新山遺跡調査小報」『昭和月報』特集号3
註12 註 9 に 同じ
註13 佐藤 順 墓 昭和52年(1977) 「『南陽市赤堀町古墳の測量調査』」
註14 山形県立博物館 昭和54年(1979) 「山形考古学雑誌10回研究公報表題」
註15 山形県立博物館 昭和55年(1980) 「『鶴ヶ峰古墳』昭和53年度調査概報」
註16 註 8 に 同じ
註17 下関市教育委員会 昭和49年(1974) 「『仁鳥山古墳』史跡調査報告書」
註18 註 14 に 同じ
註19 註 8 に 同じ
註20 当然、佐野跡と古墳群が始まる時期に、どの程度の時間的な差を考えるのかが問題となるが、調査の所見としては、接近した通過的な様相を示す可能性が強いように思われる。
註21 加藤 修 昭和43年(1968) 「『山形盆地における土器群の編年』」
註22 戸 家 和 真 昭和32年(1957) 「『山形市羽島塙』『鳴尾跡』」
註23 戸 家 和 真 昭和47年(1972) 「『北古ノ御器』の型式分類とその編年」『歴史』14号
註24 川崎 利 夫 昭和48年(1973) 「『南奥羽古墳』における古式土器群をめぐって」
註25 戸 家 和 真 昭和54年(1979) 「『北古ノ御器』第4号
註26 丹羽良・梅田敏雄・ 丹羽良・梅田敏雄 昭和49年(1974) 「『山形盆地の古式土器』『越上川流域の歴史と文化』」
註27 丹羽良・梅田敏雄・ 丹羽良・梅田敏雄 昭和56年(1983) 「『山形盆地における上器部編年試論』『庄内考古学』第16号
註28 佐藤庄一・安政史 昭和55年(1980) 「『飛上川流域の上器部編年と開拓北支との対比』」
註29 茨木光裕 昭和56年(1981) 「『山形市沢田遺跡出土土器群の様相』『さあべい』第3巻第4号
註30 佐藤正俊・佐藤庄一 昭和56年(1981) 「『泊舟跡』『赤堀町遺跡』『南陽考古』」
註31 長 梅 重 昭和56年(1981) 「『下構跡』『赤堀町遺跡』『山形県埋蔵文化財調査報告書』」
註32 註 4 に 同じ
註33 註 14 に 同じ
註34 佐藤庄一・安政史 昭和55年(1980) 「『飛野台遺跡発掘調査報告書』」
註35 佐藤庄一・安政史 昭和56年(1981) 「『山形市沢田遺跡出土土器群の様相』『さあべい』第3巻第5号
註36 佐藤庄一・安政史 昭和56年(1981) 「『高畠町史別考察古資料編』」
註37 佐藤庄一・安政史 昭和56年(1981) 「『山形県高畠町内遺跡分布調査報告書』」
註38 佐藤庄一・安政史 昭和56年(1981) 「『山形県埋蔵文化財調査報告書第17集』」
註39 伊賀 審亮 昭和47年(1972) 「『東根市原田遺跡出土の土器群』『東北江考古』3号
註40 伊賀 審亮 昭和48年(1973) 「『東根市原田遺跡出土の土器群』『東北江考古』4号
註41 小林三郎 昭和48年(1973) 「『古墳出土の土器式土器』」『土器式土器集成』Ⅱ
註42 戸家和真 昭和39年(1964) 「『東北における大型古墳の開闢』『東北の考古・歴史論集』」
註43 加藤 雄範 昭和54年(1979) 「『農上川流域での大型古墳出現の意義』『羽陽文化』109号21P~38P
註44 戸家和真 昭和59年(1984) 「『宮城の古墳』『宮城の研究』考古学編
註45 戸家和真 昭和60年(1985) 「『陸前一地域による『古墳』の編年』『季刊考古学』10号
註46 丹羽良・梅田敏雄 昭和63年(1988) 「『古墳』『山形の大地に刻まれた歴史』記念講演会(1988年8月20日)の発言など。
註47 名取市教育委員会 昭和63年(1988) 「『史跡白神山古墳』保存修復監修報告書」
註48 仙台市教育委員会 昭和63年(1987) 「『史跡白神山古墳』保存修復監修報告書」
註49 これに関しては、古野一部氏にご教示いただいた。『鏡子形』の名前は、單に「平面形圖」を示すものであって、形態分類による時期区分を含む用語ではない。
註50 白石太一郎 昭和60年(1985) 「『鏡子形』『埴生と内部構造』」
註51 丹羽良・梅田敏雄 昭和60年(1985) 「『鏡子』と内部構造による編年』『季刊考古学』第10号

第5章の参考文献 大阪初重・昭和61年(1986)「東日本における古墳文化の成立と展開——とくに福島・宮城・山形県を中心として」『歴史学』67 昭和大学

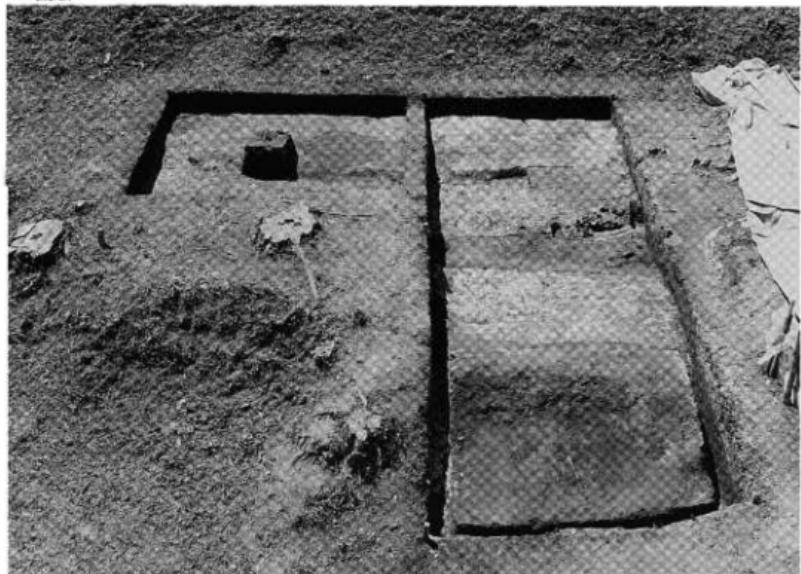
写 真 図 版

図版 1



図版 1 福井森古墳全景（調査前・南東から）

図版2



1. D区全景（北東から）



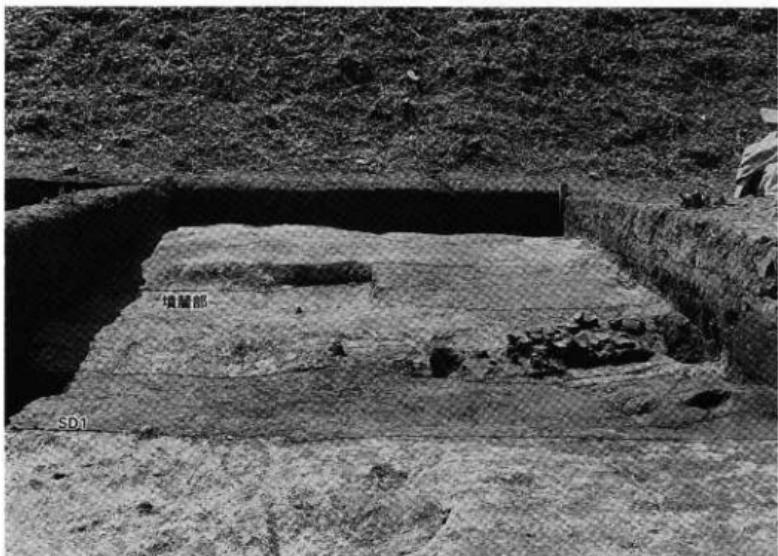
2. D区東半部の填埋部検出状況（東から）

図版2 後円部D区（1）

図版 3



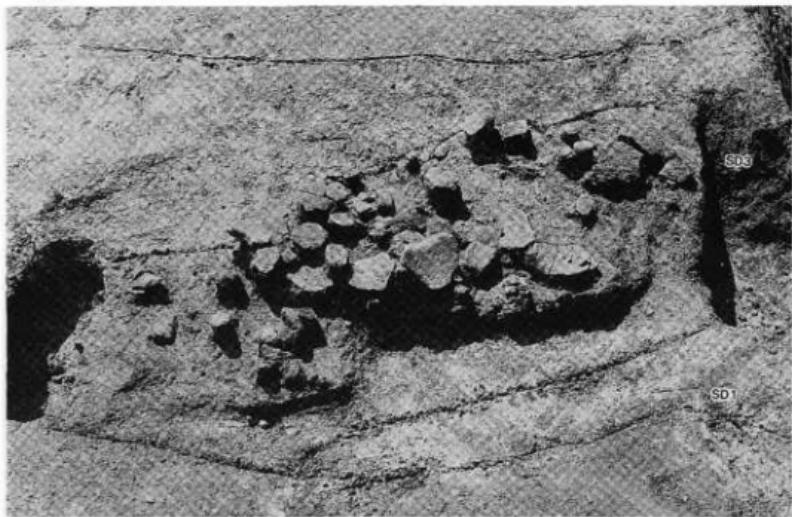
1. D区西半部遺構検出状況①（南東から）



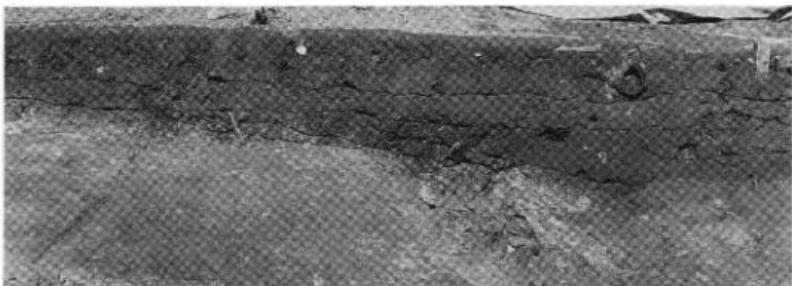
2. D区西半部遺構検出状況②（北東から）

図版 3 後円部D区（2）

図版 4



1. SD3, RPI 検出状況



2. D 区西壁土層



3. D 区中央部東壁土層

図版 4 後円部 D 区 (3)



1. E 区西半部全景
(東から)

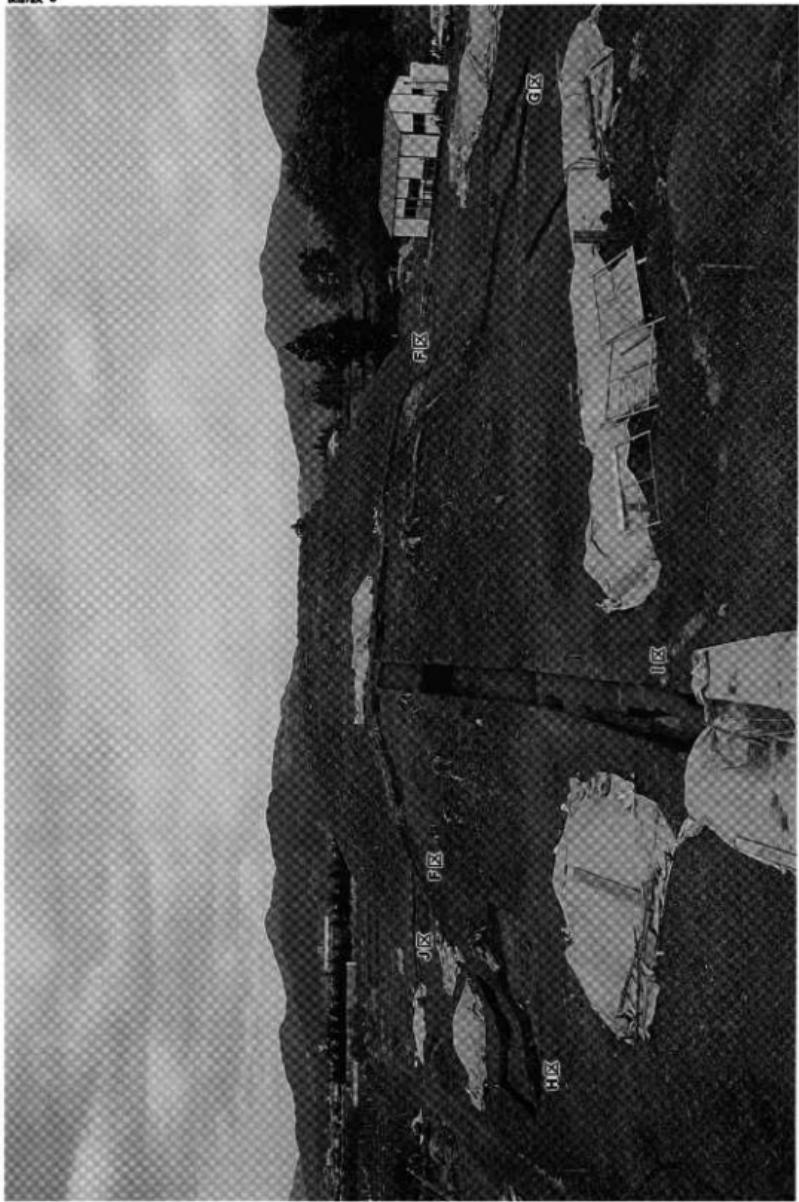


2. E 区西半部南壁
土層 (北から)



3. E 区東半部全景
(東から)

図版 6



図版 6 前方部調査地全景（南から）



1. F区全景（北から）



2. F区西部の状況（西から）

図版 8



1. F 区西部 (南西から)



2. F 区東部 (東から)

図版 8 前方部 F 区 (2)

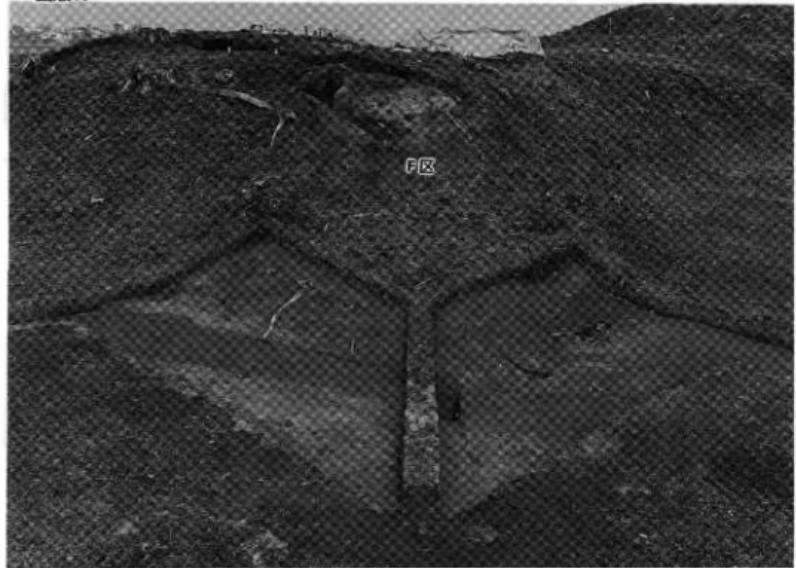


1. F区東部全景（北西から）



2. F区遺構検出状況（南東から）

図版10



1. G区全景①（南東から望んだ前方部東南コーナー一部）

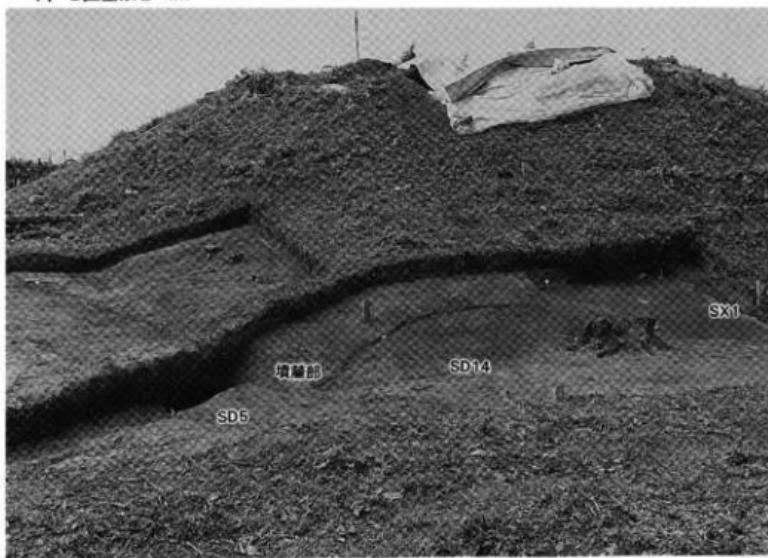


2. G区全景②（西から）

図版10 前方部G区（1）



1. G区全景③（南から）



2. G区全景④（東から）

図版12



1. G区全景⑤（南から）



2. G区南拡張区（南から）



3. G区東拡張区（東から）

図版12 前方部G区（3）



1. H区全景①（南から望んだ前方部西南コーナー部）



2. H区全景②（西から）

図版14



1. H区全景③（西から）



2. H区北壁土層

図版14 前方部H区（2）



1. I区全景①（北東から）



2. I区全景②（南から）

図版16



1. I区南部調査状況（深掘り部分は昭和54年度ZS区）（南から）



2. I区填蓋部SD16検出状況（東から）

図版16 前方部I区（2）

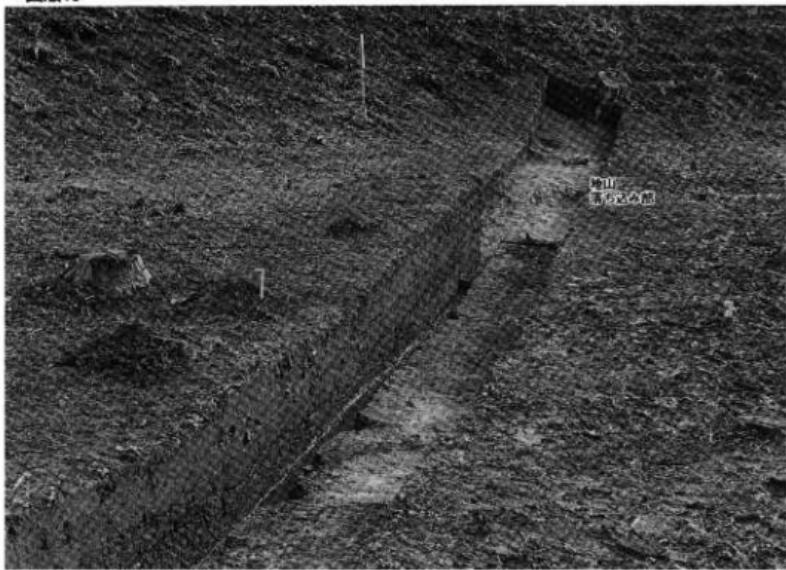


1. I区南部(旧ZS区) 土層(南東から)

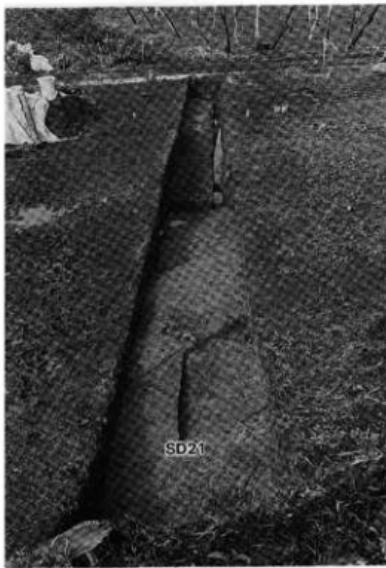


2. I区南部(旧ZS区) 西壁土層

図版18



1. J区 東半部（西から）

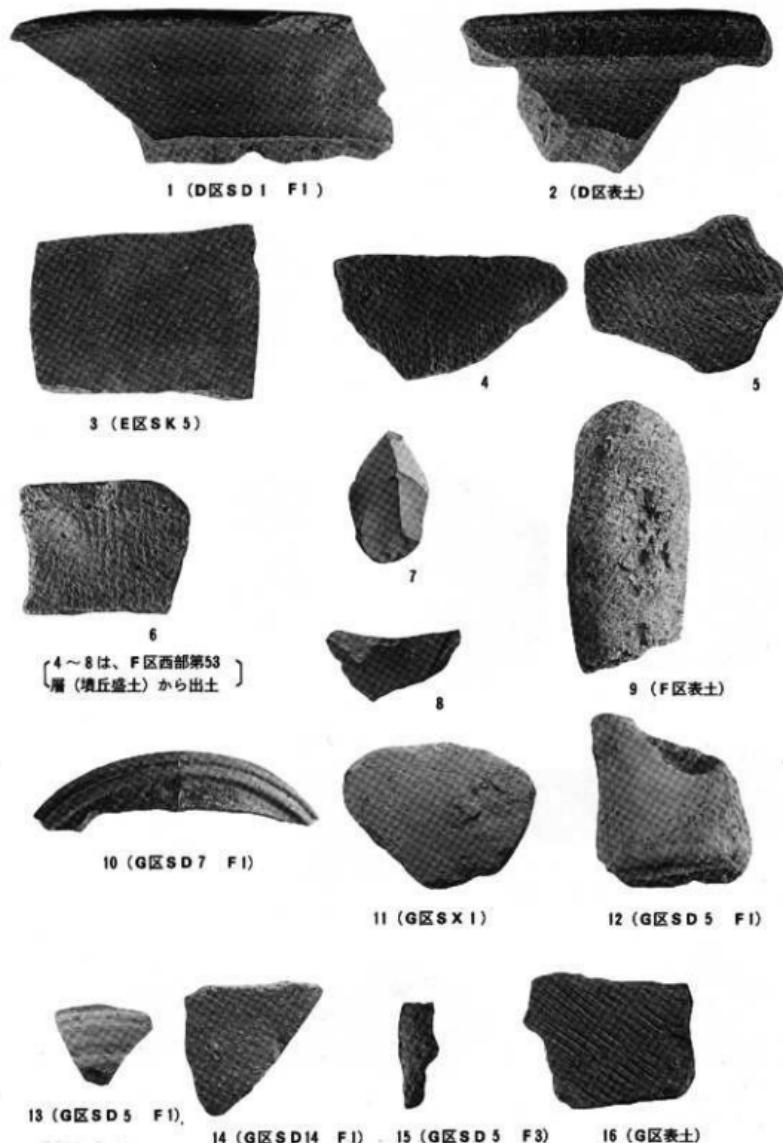


2. J区 全景（南東から）



3. J区 東部（旧KW区）状況（西北から）

図版18 前方部J区



図版19 出土遺物 (1) S =約1/2

図版20



図版20 出土遺物 (2) S=約1/2

南陽市埋蔵文化財調査報告書第4集

山形県南陽市 稲荷森古墳

—史跡整備に係る昭和63年度発掘調査報告書—

平成元年3月31日 発行

発行 南陽市教育委員会

〒999-22 山形県南陽市三間通 436-1

TEL 0238(0)3211

印刷 サンワ印刷株式会社

南陽市赤湯 346-22